
メイドのみやげはどうですか！！

世我 作人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイドのみやげはどうですか!!

【Nコード】

N8349Y

【作者名】

世我 作人

【あらすじ】

「ある日、引きこもりがメイドになった!」
宮下四葉^{みやげよつば}は男である。しかし、とんだ勘違いで、世界財閥ご令嬢のメイドに!!
女装メイドと男嫌い女好きなお嬢様、そして、個性豊かな人々が紡ぐ、
ばれたら死、逃げてでも死、な崖ぷっちコメデュー!

プロローグはどうですか！

「紅茶をお持ちしました。お嬢様」

豪華な雰囲気、豪華な空気、「お金持ちってこうゆうところに住んでいるのだろう」と考える凡人のイメージを絵にでも描いたような部屋に、一人のメイドが入って行った。

「あら、もうそんな時間？　ありがとう、四葉^{よつば}」
まるで人形のような少女がメイドを出迎える。

「いえ、わたしはお仕事なので」

「いいじゃない、あなたは私のメイド。どう？　一緒にお茶しない？」

「いえ、ですから仕事ですので……て、どこ触っているのですか……！」

「いつ見ても四葉はかわいいわ。その涙ぐむその顔、食べちゃいたいくらい」

そう言う「お嬢様」と呼ばれていた少女は四葉に顔を近づける。

「やめてください、お嬢様……！」

四葉は顔を赤くして少女を押し退けると、全速力で部屋を出て逃げた。

「あつ、どこ行くの四葉！　四葉~~~~~！！！！　ちっ、逃げられたか……」

逃げる途中、四葉は少女の舌打ちが聞こえたような気がした。

「は……は……、危なかった」

逃走にどうにか成功した四葉は、廊下の壁にもたれるようにしやがみこんだ。

「それにしてもメイド服って、フリフリが邪魔で走りにくいな……」

「メイド服を馬鹿にしてはいけませんよ」

どこからともなく、どう見ても執事にしか見えない男が現れた。

「氷柱崎さん…」

「いいですか、メイド服を馬鹿にするものは、メイド服に泣くという言葉があります。」

君には、主人に仕える者の正装の意味をまだ理解できていない、だから…！

この私、氷柱崎ノースタスが2時間二人で…」

「そんな言葉は聞いたことないですし、メイド服についての講習会を受けるつもりはありません…！！！」

氷柱崎が正気に戻る。

「大変迷惑をかけた、実は一つ君に言い忘れたことがあって探していたところだった」

「戻るの早…！　ん？　忘れていたこと？　なんですか？」

四葉は首をかしげた。

「まあ、契約上の注意事項の一つなんだが…、簡単に言うとお嬢様に君の正体がばれたら、君が死ぬということだ」

「へー、ぼくが死ぬんですか。……………。ぼくが死ぬ？」

四葉の体がふるえだす。

「じょ…冗談はやめてくださいよっ！　はは…ははは…」

「冗談ではない、本当のことだ」

「マジ、ですか」

「マジだ」

「じゃ…じゃあ、ぼく…この仕事やめさせていただきます…！」

「それは無理だ」

四葉の目の前に氷柱崎は一枚の紙を突き出した。

「この契約書があるかぎり君はやめることができない」

「でっ、でも、人の命がかかっているんですよ！　いくらなんでも…」

「もし、君が逃げたでしょう。そうなれば、お嬢様は血眼になっ

て探し出し、君を処刑するだろう」

「結局死ぬ運命なんですか！……！」

「メイドとしてここで働き、ばれて死ぬか。それとも、今から逃げ、捕まって死ぬか。」

私はできれば最初のやつをお勧めします」

氷柱崎は微笑んだ。

「うう………」

どうしてこうなってしまったのだらうと、うめく四葉であった。

そして時は、約半日ほど遡る……

突然の通達はいかがです？

およそ
約半日ほど前……

リリリリリリリリリリリリリリリリ——ガチャツ
「んう……。」

仕掛けた覚えのない目覚ましに起こされた…。

正直まだ眠い、二度寝しようかな…。

「8時か」

ぼーんとしていても、時計の秒針はカチカチと動く。

まあ、今のぼくには時間なんて関係ない。

ぼく——宮下四葉は、16歳にして自由を手に入れたからだ。

家族は今、海外で仕事をしている。

そして、その両親たちの仕送りで生きている。

昔のぼくは学校に通っていた、そのころは、学費だの生活費だのと節約の毎日だった。

でも、今のぼくは学校に行っていない。

あることがあつて今は行っていない…。

とりあえずは休学として処理されているみたいだ。その証拠に、学校からプリントやらが届く。

まあ、そんなおかげで仕送りもそれなりに自由に使っている。

「あれからもう半年になるのか…」

いろいろと思いにふけていると眠気がどこかにいつてしまった。布団から這い出すと一度ぼくは周りを見る。

今まで気にしていなかったけれど、散らかったゴミ、山積みの雑誌なんか、ぼくの半年の引きこもり生活を物語っていた。

「あとで…片付け、しようかな…」

あとでか…、思い出せないけどいつもこの言葉で物事を解決しているような気が…。

特に、この生活を始めてから一番多く使っている言葉かもしれない。

ぎゅ~~~~~

腹の虫がなった。

「確か、冷蔵庫に何か食べ物があつたはず…」

まだどこか、だるさの抜けていない身体^{からだ}を無理やり起こすとぼくは台所へ向かった。

さすがに半年間引きこもりをしていたといえ、完全に外の世界と独立することはできない。食べ物もその一つだ。

でも、近所のコンビニやスーパーは、死んでも行きたくない。もし知り合いに会ったとき、「こいつ引きこもりしてるんじゃないかっ
たけ」などと思われたくないし、そもそも集団で同じ空気を吸いたくないという自分流の引きこもりのプライドがあるからだ。

それでも食べ物は手に入れないと餓死してしまう。

世の中は便利になった。引きこもっていてもインターネットを使えば何でも手に入る。

今のぼくは金銭面は不自由してないから何でも好きに買える。一昔前に生まれていたら、とつくに死んでいたかもしれない。

ガチャツ キー---

台所に着いたぼくは冷蔵庫を開いた。

「食パン2枚とマーガリン…」

神はぼくに朝はトーストにしろと…。

とりあえず、食パンを取り出しオーブントースターに入れて5分にタイマーを合わせる。

「食料…また注文しないといけないな…」

食べ物が無くなったのは確かに問題だ。しかし、それはあくまでも昔のぼくの話。

今のぼくには、「十分すぎるほどの生活費がある!!」
静かでオーブントースターの音以外聞こえない部屋の中ぼくの声

が響いた。

プルルルルルルルルルルルルルルルル——

突然、台所隣にあるリビングから電話機の呼び出し音が鳴った。
急いで取りに行く。

こんな朝早くいったい誰だろうか。

ガチャッ

「もしもし、宮下ですが…」

『四葉ちゃん？四葉ちゃんなの？』

この聞き覚えのある声は…！。

「そうだけど…でっ、久しぶりの電話だけど、何の用？ 母さん」
声の主は、海外にいる母からだった。

『もちろん！ かわいい我が子の生存を確かめるためによ！ 大丈夫？ 半年間、一人ぼっちだったけど死んでないわよね！？』

「朝っぱらからいきなり電話してきて、死んでないか？ って久しぶりに話す息子に対しての言葉か…！！」

『あら！ そっちは朝だっけ！ ママ忘れてたわ。ごめんね、四葉ちゃん。こっち昼だから、

ところで、死んでないわよね？』

謝るところそこ————！！？ しかも、ぜんぜんぼくの話聞いていない！！！！

「ぼくはうさぎみたいに、ストレスには弱くないし、死んでたら電話に出れないでしょ！ 普通…」

『わからないわよ。今の幽霊、インターネット使えるって聞くし』

どこの世界の幽霊だよ…。

どうしてこう、母さんとの会話は会話として成り立たないのだろう。

『四葉ちゃん』

「今度は何？」

『ご飯、しっかり食べてる？』

今頃そこかよ…。

「うん、とりあえずは食べているよ。正直、この話題もう少し早くいってほしかった…」

『あらゝごめんなさいね。ママ、ちよっと天然だから』

自分で天然って、言ってるよ。この人…。まあ、「天然」と自称するほど天然なのは、息子である自分がよくわかっているけど…。

「もう用は、それだけ？ 電話切るけど」

『あー！！ ちよっと待って！！』

「待てって、まだ何かあるの！？」

本当のところ早く電話を切りたい、母さんのちよっと待っては太抵、嫌なことが起きる。

幼稚園のときは、それで漏らしてしまったし、小学校は風邪を引かされ、中学校は修学旅行に置いてかれた。

言わば、母さんの「ちよっと待って」は、ぼくのトラウマだ。

『パパからの伝言』

「父さんからの伝言？」

今回ののは大丈夫そうだ。

『学校を休学して引きこもっている人間なんか金を出せない！

自分で働け！ だって』

前言撤回。

「金を出さないって、仕送りのこと！？」

『んゝゝ、そうゆーことみたい。あっ！ もう仕事の時間！！

また元気でねゝゝ！』

「えっ！？ ちよっ、母さん！！」

ガチャッ ツーツーツー

ぼくは床に項垂れた。

ぼくの自由が崩壊した…。

この先、どうして行こう…。

チーーーーーン とオーブントースターのお知らせ音が鳴る。

ぼくは中の食パンを取り出した。少しコゲた食パンにマーガリンを塗っていく。

父の伝言が頭の中を過ぎ^よった。

「働^{はたら}けか……」

マーガリンの所為^{せい}か出来上がったトーストは、かなり塩辛い気がした…。

突然の通達はいかがです？（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

こういうことは初めてなので、文などに間違い等ありましたら、感想や評価など、ドシドシ送ってください。

できるだけ、よい作品にできるようにがんばります。

みやげは引きこもりを卒業するそうです！

「これからどうしようか……」

朝食の後片付けしながらつぶやく。

親の衝撃的発言によって、ぼくの今まで創り上げた生活が崩壊した。

それはまるで、ビルの爆破解体の様にいきなりで、一瞬の出来事だった。

リビングの時計をしてみる。

「9時……」

もう1時間経過したのか…、時間は経つのが早い。

正直、ぼくは現実を受け入れるのが遅い…。

今でも、衝撃的発言が母の天然による勘違いや、夢であることを願ってしまっている。

そう、これは何かの間違い、間違えだ————！！！！

プルルルルルルルルルルルルルルルルルルル————

再び、リビングの電話機が鳴る。

まさか…！ 母さんから！ ふふふ、やはり間違いだったか。

母さんが天然でよかった……！

心臓には悪いけど…。

電話に出たら何て言おうか。

ガチャッ

怒っていてもしょうがない。許してあげるか。

「もしもし！ もー、冗談きついよ。母さ——」

電話機の向こう側から声が聞こえてくる。

『父さん、なのだが……』

一瞬、世界が凍りついた…。

『おい、四葉。聞こえているか?』

「あつ、ちゃんと聞こえているよ。それよりどうしたの、夫婦そろって息子に電話してくるなんて」

我に返った。

『そのことなんだが……』

「?」

まさか…。

『さつき…、母さんから電話、あつたよな』

「う…うん、あつたよ…」

ぼくはゆっくりと息を呑んだ。

『その話、全部——』

嘘だと言ってくれ。

『本当のことだ』

ぼくはダメ押しの一撃を受けた。

「なっ、なんで同じことで二人とも連絡してくるのさ!？」

正直、二度の精神的ダメージは欲しくなかった…。

『母さんに頼んでしまったからだよ』

「へ?」

『かあさんは、えー何というか…。天然? だからな、お前がこのことは母さんが天然だからきつと勘違いないと、思うのではないか。ということでお前にダメ押しの連絡した』

考えが読まれている!?

「でもっ、いくらなんでも今日から仕送りストップは厳しいかと…」

そういえば、もう冷蔵庫の中は空だ、ここでストップを食らうと仕送りも底を尽き、本当に不味い。

『厳しい? よく言うな、四葉』

『半年間、仕送りされていただけありがたく思え、実際のところ

お前が引きこもると言ったときに父さんは仕送りを止めようとした、
しかしな、母さんが泣いて頼むから仕方なしに続けることにしたん
だ』

母さん…、ありがとう。

「でっ、何で今さら仕送りをストップしようど？」

何で半年なんだろう、一年でもよかったはず…。

『……』

ん？ どうしたんだろう。

『実はな…、四葉。父さんたち…、ここに移住することにした』

「はっ!？」

なっ、何いつているんだ!! 父さんはっ!!

『母さんがここをとても気に入ってな、移住の準備期間、つまり
半年間だけ息子に情けを掛けてやってくれと言うから…』

それで半年…。あのクソ母親、結局は自分の私利私欲しりしよくが一番で息
子が二番か。

感謝して損した……。

『まあ、そんなに母さんを責めるな、母さんは仕送りゼロのそこ
ろをどうにか、半年にしてくれたんだぞ。それだけでも十分じゃな
いか』

そのゼロにしようとしていた張本人が、そういうことをいわない
で欲しい…。

『おっと、もうこんな時間か…。すまないな、四葉…父さんたち
を恨まないでくれ。』

これもお前の成長のため』

「えっ!？ もう切るの!」

これを切られたお仕舞しまいだ!

何とかして命綱を留めないと!!!

「父さん、ぼく…父さんに言わないといけない事があるんだ!!」
!」

『悪いが時間が無い、まあ…、短い話なら聞いてやれるがどのぐ

らい時間が掛かるんだ?』

これはチャンス!!!!!!

「えっと…、いつ、1時間ぐらい……」

ガチャツ… ツーツ… ツーツ…

今…、命綱が切れる音が聞こえた……。

これで完全に仕送りがストップしてしまった…。

「やっぱり、仕事を探すしかないのか…」

ほとんど、家具が置かれていない殺風景なリビングで一人^{ひとり}呟く。

仕事か…、こんな引きこもり男を拾ってくれる職場が在^あるのだろうか…。

「こんなところで考えていてもしょうがないし、部屋に戻るか…」
重い足取りでぼくは、自分の部屋へ戻った。

「そんなに都合のいい仕事は無いか…」

自室にあるパソコンの画面を見て、ため息をつく。

「接客業…、接客業…、接客業…、何でこんなに接客業が多いんだっ!!」

人と接するのが嫌で引きこもっているんだ。いまさらその信念は曲げられない。

「もっと少ない人間としか接さない仕事は無いのかっ!?!」

パソコンの電源を消す。

インターネットの求人検索サイトを探しても、なかなかいい仕事が見つからない。

「この際、贅沢は言っていられないな…」

今日中に何か仕事を探さないと、明日から少なくとも食料はゼロだ。

こんな事が長く続けば、流石に餓死^{さす}してしまう。

今度は雑誌の山に手を伸ばす。

「本当にどっかに、ぼくに合った仕事は無いのかっ！」
雑誌の求人欄をものすごい速さで読んでいく。

1時間後：

「やっぱり無い……」

ぼくは愕然^{がくぜん}とした。

何でこれだけ探しても見つけれないんだ、理想の仕事。

思わず手に持っていた求人雑誌を投げ出した。

バスッ……

ドドドドドドドドドッ！！！！――――

「えっ！？」

積み上げられた雑誌やゴミの山が倒壊し始めたっ！！！！

まっ、不味い……。ぼくはゴミの波に消えていった……。

あ……。ここで死ぬのか……。ぼくは。

きっと、その内の新聞に『引きこもり高校生自宅で変死！！』なんて記事が出るんだろうな……。

「てっ…、死んでたまるかー！ーっ！！」

埋もれながらもどうにか、生き返った。

「てゆうか普通、死なないだろ」

何で自分にツツコミを入れているんだ……。

ふさっ…

「？」

山が倒壊したため何かが落ちてきた。

求人募集

- ・ 使用人募集！ あなたも中帝財閥^{なかみかど}の使用人になってみませんか！
- ・ 時給〇〇万円から！

・当日面接可!!
下に地図が書いてある。

「時給〇〇万円っ!!!!」

なんつー仕事だっ!

使用人か…、これだったらいけるかも!

「でも、中帝財閥って何だ?」

聞いたことが無い。

まあ、これだけ時給のいい仕事はそうそうあるものの無いし、面接を受けに行ってみよう。

「と…その前に」

面接を受けるときの服装はどうすればいいか……。

髪は半年間の結果、肩まで伸びているし、服も一昔前のダサダサなやつだし。

髪を切りに行くにも、服を買いなおすにも、金が無いし……。

「大金目当てなだけだし、当たって砕けろだな!!!!」

今、珍しくポジティブになった気がする! 砕けちゃいけないけど……。

着替えが終わった。求人紙に書いてある地図をあらためて確認する。

「意外と近いな……」

場所的にここから30分ほどのところだった。

この近くに金持ちが住んでいるなんて聞いたこと無いけど。

玄関に移動した。

久しぶりに靴を履く。

ぼくは恐る恐るドアノブに手を伸ばした。

ギィィ……

ドアが開く。

ぼくはこうして外の世界への一歩を踏み出した。

「これで引きこもりは、卒業か……」

みやげは引きこもりを卒業するそうです！（後書き）

次回はいよいよメイドが出ます！！
引きこもりの話ばかりですいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8349y/>

メイドのみやげはどうですか！！

2011年12月2日22時47分発行